

「資本論を読む会」便り

2025.3.15 No. 96

2月は次の箇所を読みました。

第Ⅰ部：第1篇 第1章 第3節 Aの二 a 相対的価値形態の内実 の中ほどまで

第Ⅱ部：第3篇 第12章 第4節 マニフアクチュアの中での～ の中ほどまで

※ 編集人の復習ノート。報告や議論などを基に、要点を簡単に紹介します。
段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則通りでない場合もあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第97回

第Ⅰ部 第1篇 第1章 第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

X量の商品A=Y量の商品B または X量の商品AはY量の商品Bに値する。
(20エレのリンネル=1着の上着 または 20エレのリンネルは1着の上着に値する。)

二 相対的価値形態 a 相対的価値形態の内実

前回読んだ第1・2段落の復習から始めました。

上に掲げられている等式の基礎は、

リンネル=上着

だということです。この式で、リンネルも上着も同じ質を持っていることを表現しています。質が異なれば、大きいとか小さいとか量的に比較することができません。この式の場合の同じ質は価値と呼ばれています。

第3段落 (64)「しかし、質的に等置された二つの商品は、同じ役割…」 ～

価値表現の仕組み

- リンネル=上着 (2つの商品は質的に等置されているが、その役割は異なる。)

(1)この式は、リンネルの価値だけを表現している。

リンネルが、自分に等しいもの(「等価物」)として、

自分と「交換されうるもの」として、

の上着に関係することによって、自分の価値を表現している。

(2)この関係の中では、

上着は、価値の存在形態、価値物、すなわち価値が目に見える物として現われている。

それは、価値以外にリンネルと等置されるものを上着はもっていないから。

(3)こうして、リンネルの価値は、上着という一つの物として目に見える形で表される。

酪酸と蟻酸プロピルの例が出ています。これらは異なる物質で、示性式で書くと、

酪酸： $\text{CH}_3(\text{CH}_2)_2\text{COOH}$ 蟻酸プロピル： $\text{HCOOCH}(\text{CH}_3)_2$

となりますが、これを

酪酸 = 蟻酸プロピル

と書くと、物質としての違いを捨象し、それらの分子を構成する原子の個数に着目して比較していることになります。つまり分子式を比較しています。これらの分子式は、

酪酸： $\text{C}_4\text{H}_8\text{O}_2$ 蟻酸プロピル： $\text{C}_4\text{H}_8\text{O}_2$

であり、この等式で酪酸の分子式を蟻酸プロピルで表した、と言うわけです。

酪酸 = 蟻酸プロピル

という式を見たとき「異なる物質なのに何故イコール？」と思ってしまいますが、このような表現で、それぞれの物質の構成原子数を見て比較している、ということです。

リンネル=上着

という式も同様で、この場合はそれぞれの価値を比較しています。

第4段落 (65)「われわれが、価値としては商品は人間労働の…」 ～

商品の価値という性格は他の商品との関係(価値関係)の中でどのように現れるか。

- 商品と商品の中から価値の実体が解明された。
- しかし、価値として商品は人間労働の凝固であるというだけでは、商品を価値抽象に還元するが、現物形態と違った価値形態を与えない。
- リンネル=上着 という価値関係の中では、商品の価値性格が現われてくる。

第5段落 (65)「たとえば上着が価値物としてリンネルに…」 ～ (注17a)まで

回り道をして織布労働を抽象的人間労働にする。

- リンネルを作る織布労働だけを見ても抽象的人間労働は見つけ出せない。
- 上着をリンネルに等置することによって、上着が価値物としてリンネルに等置される。
これは、裁縫労働を織布労働に等置することであり、その結果、裁縫労働という具体的有用労働が二つの異種労働の共通な質、すなわち、人間労働一般に還元される。
- このようにして、織布労働も裁縫労働と区別されない特徴を持っていること、すなわち抽象的人間労働であることが、明らかになる。

「回り道」が分かりにくいです。リンネルは価値としては抽象的人間労働の凝固ですがリンネルそのものを見るだけでは直接には分かりません。しかし、リンネルは上着を価値物として等置するという「回り道」によって、上着をつくる裁縫労働を抽象的人間労働の直接的な実現形態にし、そのことによって、自らの価値を形成する労働が抽象的人間労働であることを、裁縫労働によって目に見える形で表すことが出来ます。

第6段落 (65)「しかし、リンネルの価値をなしている労働の独自の性格…」 ～

リンネルはどのようにしてその価値を表現するか

- 人間労働は、価値を形成するが、価値ではない。商品の価値は、人間労働が凝固したものである。それゆえ、リンネルの価値を人間労働の凝固として表現することが必要になる。
- そのためには、リンネルの価値をリンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品とに共通な「対象性」として表現しなければならない。

第Ⅱ部 第3篇 第12章 分業とマニファクチュア

第4節 マニファクチュアのなかでの分業と社会の中での分業

前回の第1段落～第6段落の復習から始めました。

社会的分業は、労働に注目すると、

一般的分業……社会的生産の大きな区別——農業と工業(農村と都市)の分割

特殊的分業……一般的分業の内部の様々な区分。農業(牧畜や農耕)と工業(製造業など)

個別的分業……それらの分野での一つの作業場内における分業

に分けられます。

社会的分業の出発点は、

(1)家族や種族の中での自然発生的な分業の発生。性や年齢の相違から。

(2)共同体間の接触から商品交換が発展し、共同体が社会的総生産の分業を形成。

という相反する二つがあります。

商品交換によって媒介されている社会的分業の基礎は、都市と農村との分離であり、社会の全経済史はこの対立の運動に要約される、としています。

次に、マニファクチュアの中での分業と社会の中での分業の相違として、

(1)マニファクチュアの中での分業は、一人の資本家が手工業者を一つの作業場に集める必要があり、同時に充用される労働者の一定の数がその物質的前提になる。

(2)社会の中での分業のためにも、人口の大きさとその密度が物質的な前提をなしている。ただし人口密度は相対的なものである(交通機関の発展度なども関係する)。

が挙げられています。

マニファクチュア的分業と社会的生産の関連に関して、マニファクチュア的分業は、

(1)社会の中での分業がすでにある程度まで発展していることを必要とする。

(2)社会的分業に反作用してこれを発展させ何倍にも複雑にする。

という指摘もありました。

以上が、第1～6段落の大体の内容です。

第7段落 (371)「われわれはまず第一にマニファクチュアの起源を、次に…」 ～

社会的分業と作業場内での分業は本質的に異なる

●社会的分業と作業場内での分業が似ている点もある。

- ・社会的な分業関係にあるさまざまな産業部門のあいだに内的な紐帯があるような場合、部門間の関係が分かる。

例：牧畜業者が獣皮を生産し、その獣皮を製革業者が鞣皮にし、その革を使って製靴業者が長靴を製造するという場合、最後に出来上がった長靴は、各業者の段階的生産物(特殊労働)の結合生産物である。

- ・マニファクチュアでは一つの作業場で労働のつながりが見え、分業の関係を理解できる。

●本質的な違い (注番号57がついている箇所の後)

- ・社会的分業関係にある独立業者間のつながりは労働生産物が商品として交換されることによる。
- ・マニファクチュア的分業では、部分労働者の生産物は商品にはならない。商品になるのは部分労働者の共同の生産物である。

●二つの分業の相違点 (注番号58aが付いている箇所の後)

- ①社会的な分業では、社会内の独立した労働を媒介するのは、彼らの生産物の売買による。マニファクチュア的分業における部分労働の関連は、同じ資本家によって雇用され、

資本の指揮と命令によって結合労働力として使用されることで媒介される。(部分労働者の生産物は商品にはならず、何人もの部分労働者の共同の生産物が商品となる。)

②マニファクチュア的分業は一人の資本家のもとへの生産手段の集中を前提とする。社会的分業は、独立している多くの商品生産者のあいだへの生産手段の分散を前提。

③マニファクチュア的分業は、比例の鉄則が一定の労働者群を一定の機能に縛りつける。社会的分業で、商品生産者と彼らの生産手段を社会のさまざまな生産部門に配分するのは、偶然と恣意とが複雑に作用することによる。

●社会的分業にもとづく社会的生産がどのようにして社会的な均衡関係を保つのか。

社会にあるさまざまな生産部門は、それぞれ偶然と恣意によって生産しているように見えながら、社会的生産は一定の均衡を保つ傾向がある。商品生産者は一定の使用価値を生産する。しかし、使用価値の生産量と欲望の量的な差異が生じる。この差異は、社会的分業の内的な紐帯がいろいろな欲望量を結び合わせて自然発生的な体系にする。

他方では、社会が処分できる総労働時間のうちのどれだけを、個々の商品種類の生産に支出することかできるのかは、それぞれの生産物が商品として売買されるときに価値法則が決定する。

この価値法則の貫徹の仕方というのは、社会的生産が均衡しようとする不断の傾向が、この均衡が不断に破壊されることに対する反作用として働く。つまり不断の不均衡と攪乱のなかに、それを元に戻そうとする作用として価値法則は働く。

●二つの分業の相違点

・マニファクチュア的分業では、それぞれの部分労働者の配分や配置は、それまでの経験にもとづいて、資本家の計画にもとづいてア・プリオリ(はじめから)に決められる。

社会的分業では、ア・ポストオリ(あとから)決まる。市場価格の変動によって知覚される。商品生産者が恣意的に行った行為が、見事に破産するという形で、それは自己の必然性を示す。

・マニファクチュア的分業では、資本家のものである全体機構の手足でしかない部分労働者に対して資本家のもつ無条件的権威を前提とする。

社会的分業では、独立の商品生産者たちを互いに対立させ、競争という権威のほかには、彼らの相互の利害関係の圧迫が彼らに加える強制のほかにはどんな権威も認めていない。

●資本家たちは、マニファクチュア的分業を労働の生産力を高めるものとして賛美する。

つまり労働者の細分作業への拘束と、資本のもとへの無条件的服従を擁護する一方で社会的生産においては如何なる統制や規制をも、個別資本家の不可侵な所有権や自由な自律的な独創性への侵害として非難する。

彼らは工場制度を熱狂的に弁護する一方で、社会的な規制には、「社会を一つの工場に変えたいのか!」と金切り声を出す。つまり工場制度は労働者だけにすべきだという。

この段落の要点をまとめるのは難しく、上記はほとんどレジュメそのままです。編集人の力不足です。済みません。

この段落では、「価値法則」の意味が議論になりました。資本論の中では3箇所目の出現ですが、これまでのところ「価値法則とは～」といった説明が見当たりません。資本論事典には「…商品の生産と交換を規制する根本法則である。すなわち、商品の価値はその生産に必要な社会的労働によって規定される、という価値規程を基礎にして、その価値規程の展開する内的法則が価値法則にほかならない。」とあるのですが、よく分かりません。今後の研究課題です。